

本音と建前の二元論や 数値絶対のサーベイ調査で 人間と社会、事象の意味は語れない

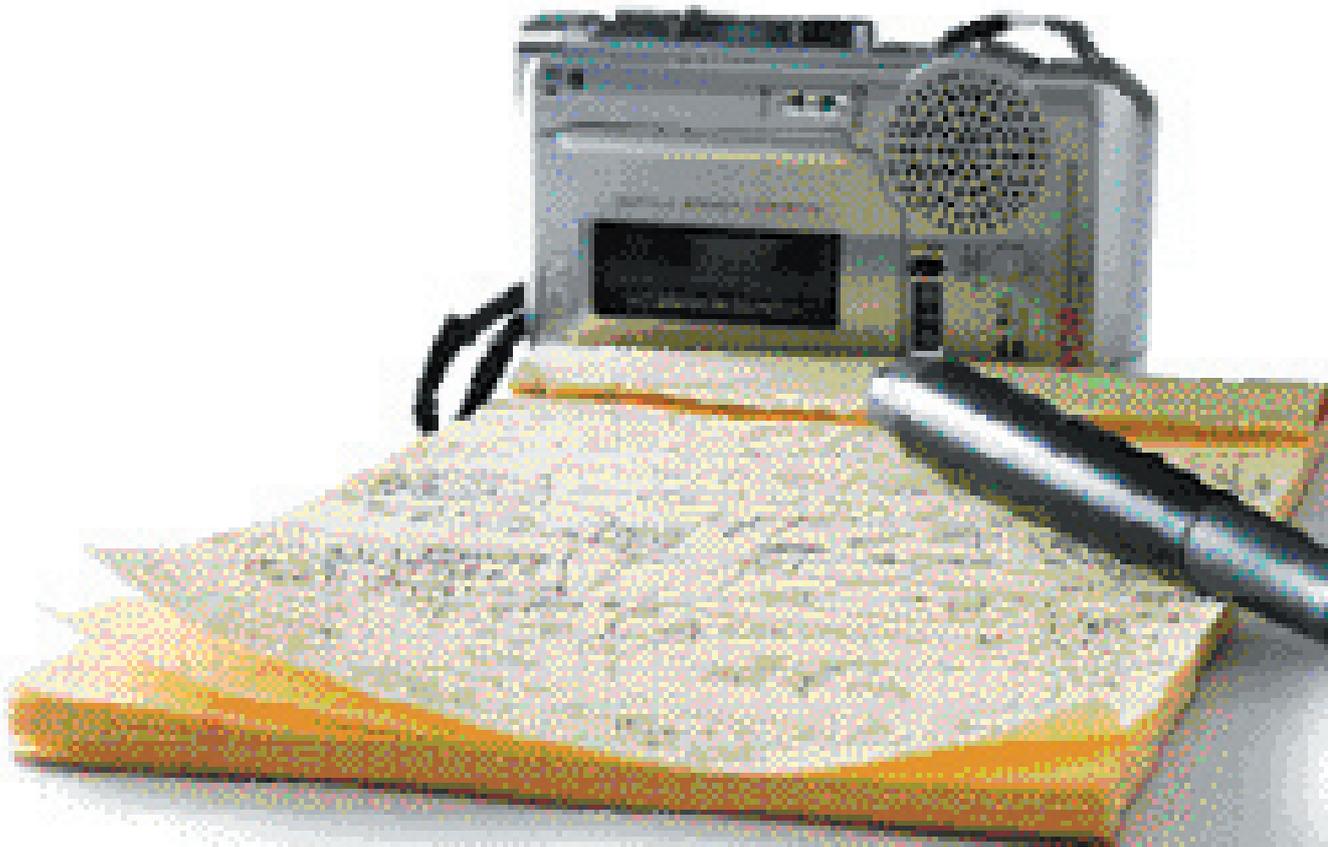
現代社会では、物事を判断する「物差し」を求める傾向があります。ISOやHASAP、大学の授業評価等々、社会の幅広い領域でさまざまな物差しが定められ、それに照らして是非が判断されているのです。もちろん、物差しを設けることは、物事をよりよい方向に進めていく上で有効な方法の一つですし、それ自体が悪いというわけではありません。問題なのは、そうした物差しが人びとのなかで「すでにある動かしがたいもの」と認識され、どうつくられ、どう機能しているのか、背景となる生きた現実や現象に目が向かなくなってしまうことです。

例えば、私たちはさまざまな分野で、アンケート調査に代表されるサーベイ調査の結果というものをよく目にします。テレビの選挙速報で「投票率数%で当選確実」と報道される

のもおなじみの光景です。これなどは相当、精度が高いものですが、過去に覆ったことがあるように、それとて絶対ではありません。アンケート調査に答えたことのある人なら、どの選択肢も自分の気持や意見に適合しないと感じたり、どちらにマルをつけようかしら迷った経験も多いはずです。アンケート調査は、質問項目の設定の仕方によって、結果にかなりの開きがでてしまう。調査・分析した結果というのは、決して絶対ではあり得ないということです。

よく「本音と建前」という言い方をしますが、人間の心理や行動、あるいは社会のダイナミズムというものは、本音と建前のような単純な二分法で片づけられるものではありません。また、両方を同時に説明できるロジックも存在しないのです。社会や事象をみると、私たちはこのことを忘れてはいけないと思います。常識という、人間が社会生活をおくる上での物差しさえ、時代とともに変化しています。情報も然りです。極端に言えば、そうした人間や人間が形成する社会というものの本質への理解や洞察を抜きにして形式だけを整えること、既存の物差しを絶対視することは、もうやめるべ

人為的な「物差し」だけでは、人間や社会は測りきれない。
健全な懐疑心を育て、What と Why に目を向けつづけよう。



きだと思うのです。私たちに今必要なのは、健全な懐疑心をもつことであり、目の前に提出された「結果」を鵜呑みにするのではなく、それが何を意味するのか、なぜそうなのか、考える視点と能力を持つことだと思います。

「木を見て森を見る」ためにはどうすべきか。 その視点とスキル、問題意識が ビジネスの場面でも力を発揮する

私は社会調査方法論やフィールドワークの研究を専門の一つとしていますが、社会科学系の大学にこうした講義があるという、怪訝な顔をする人も少なくありません。フィールドワークといえば、人類学の専売特許のように思う人が多いからです。特に、日本のように現代社会を舞台にしたフィールドワークの伝統が確立されてこなかった国においてはこの傾向が強く、社会調査というとサーベイ調査が代表格のようにみなされてきました。しかし、海外では非常に対照的な状況が存在します。つまり、欧米諸国では社会学や経営学、マーケティング・サイエンス、心理学などきわめて広い分野にフィールドワーク的な手法が用いられ、興味深い報告書が次々と発表されているのです。そればかりか、これまでの通念や従来の理論を覆すような思いがけない知識と情報が多数もたらされています。さらに、これまで主流の方法であったアンケート調査を典型とするサーベイ調査あるいは出来合いの統計資料のみに依存する調査法が抱えるさまざまな限界や問題点をも明みに出していったのです。

フィールドワークは、もともと単一の技法をさしている言葉ではありません。フィールドワークの基本は、生きた人間や社会、文化のなかに入っていくこと。物事が起こるまさにその現場に身をおき、そこで体験することを核にしながらも、同時にさまざまな技法を駆使して社会や文化あるいは人間存在という複雑な対象を丸ごと捉えようとする

アプローチそのものなのです。

現代の社会や経営を対象としたフィールドワークは、多くはインタビューによって調査を進めていきます。先程も言いましたように、人間は矛盾をはらんだ生き物で、言っていることとやっていることが違いますから、どうしてそこに乖離があるのかまで目を向けていくことが重要になります。ある意味では、犯罪捜査などと同様、「裏を取る」ことが大切になってきます。つまり、ここでも、鵜呑みにするのではアタマから疑うのでもない、健全な懐疑心が必要なのです。

これも誤解されがちなことですが、事例研究と統計的研究は対立するものという見方があります。確かに、事例研究ではともすれば個別の事例(木)にとらわれるあまり、全体(森)についての考察がおろそかになりがちです。逆に統計的研究では、全体を見渡しある種の法則性を明らかにすることはできて、一つ一つの事例(木)の理解に役立たないということが起こりがちです。しかし、優れた事例研究は、木について徹底的に調べながら、森のなかでの位置付けを吟味し、それによって森の位相を明らかにしていきます。同様に、優れた統計学的研究では、調査のさまざまな段階で事例研究の結果なども参照して考察を深めていくというアプローチをとることによって、森の分析と木の理解が無理なく調和するのです。事例研究法と統計的研究法は、対立する研究アプローチであるどころか、相互に補完しあうものであり、必然的に他を前提にしているとさえいえます。実際、海外では一人の研究者が両方のアプローチを併用したり、専門の異なる複数の研究者が関わることで優れた成果を生み出している事例が少なくありません。

大切なのは「木を見て森を見るためにはどうしたらいいのか、その視点と問題意識をつねにもちつづけることです。その努力を持続しつづけること、そして「木を見て森を見る」ためのスキルと知識を身につけることは、研究だけでなく、ビジネスのさまざまな場面でも大きな力を発揮すると思います。(談)

商学研究科教授 佐藤郁哉

1955年生まれ。東京大学文学部心理学科卒。
東北大学大学院博士課程中退(心理学専攻)シカゴ大学大学院修了(Ph.D.、社会学専攻)
専門は社会調査論、組織論、文化社会学。
暴走活動の全体像を明らかにしたいと、京都に1年以上住み着いて現場調査をした行動派。
演劇やジャズなど、さまざまなテーマを社会学的アプローチで研究してきた。
「いま興味のあるテーマは出版。
組織の論理と職人気質のあり方を探求していきたいと思っています」

